

環境造形としての壁面空間

阿 部 靖 子*

(平成2年10月31日受理)

要 旨

石造建築を主とした西洋建築と、木造建築を主とした日本建築では、壁の存在そのものが、モノと空間とのかかわりに大きく影響を与えている。日本建築は、空間のフレキシビリティを特徴とし、ヒトとモノのかかわりで、その都度空間が成立する。それに対し、西洋建築は空間の持つ固定的意味が、モノの存在を通して成り立ち、モノと空間の関係をヒトがつくり出す。壁は、美術史の上でも重要な作品を生み出したが、それは建築や家具という生活の中のモノに対して働きかけた、ヒトの造形表現としてもとらえることができる。このような「ヒトとモノと空間のかかわり」という観点で、日本の住宅や公共施設における壁を見ると、ヒトのための空間をつくり出しているとは思われないようなものが多い。壁という外部と内部を明確に区別する構築物は、日本の生活空間になじみのうすいものであり、その材質、形態、色彩、開口部との関係等、考えられなければならない。

KEY WORDS

Wall Spaces

壁面空間

Environmental Arts

環境造形

man-object-space

ヒトモノ空間

I は じ め に

日本の一般的建物における壁は、近代建築以降重要な空間の構成要素となり、その位置、構造、材質など生活様式に伴い大きく変化した。その中でも鉄筋コンクリートという新材料と結びついた壁は、高層建築や集合建築において、空間を区切るものとして急速に普及し、均質的で無機的な空間を造りだしてきた。特に学校の建物は、機能性経済性の重視が画一的建築を生み、壁と空間の造形的配慮あるいは子ども達への教育的配慮の欠けたものになっている。

一方、西洋建築に見られる壁はその素材や面の持つ特徴から、壁画が描かれたり、浮彫がされたり、人間が造形活動をおこなった跡を残しているものである。それらの作品は、美術史上絵画や彫刻分野の対象となると同時に、人間が豊かな空間をつくり出そうとする環境造形的意志の表われとして見る事ができる。

このような壁と造形行為の関係を比較考察することは、日本の環境空間と造形の独自性を考えるための視点となり、生活環境 特に学校環境と環境デザインに対する1つの方向を与える

* 芸術系教育講座

こととなる。従って本稿では、壁と空間を指す意味で「壁面空間」という言葉を用い、その観点を環境造形という、「ヒトとモノと空間の関係を考える立場」に据えている。壁を媒体としたヒトとモノとのかかわりをまず歴史的にとらえていくことが本稿の目的であり、その中で現代のヒトとモノと空間の抱えている問題が明確になる。そしてそれは、壁に限らず、環境造形教育の根本的問題につながるものと思われる。

II 西洋建築における壁面空間と造形

1. 壁面の成立条件

人類は厳しい自然環境の中に、まず人類に適したすまいを見つけ出す。次に、自分達の手ですまいを作らなければならない状況の中で、「竪穴住居」と呼ばれる世界的に共通な住居を作り出す。この段階まではほとんど変わらなかった住居形式が、その後、環境の違いにより、材料、構造等の異なるものになっていく。例えば自然環境の中で何を第一条件にするかで、その形態が違って来るわけである。雨が多い所では屋根を優先し、寒さが厳しい所では壁をがっしり組んでから屋根をかけて密閉しなければならない。

壁は、まず獣や敵から身を守るために必要な物として現われた。石を積む、障害物を置く、土を掘って壁をつくり、掘った土を積むことによってさらに土塁をつくる。この意味での壁は家屋の外壁だけでなく、堀や城郭や砦等の壁も含まれる。従って自分達の生活や生活に必要なものを守る機能の壁が、まず生まれる。

次に建物としての空間をつくり出す壁を考えてみると、建築方法によって大きな違いが生まれているのである。建築の種類は、用途・材料構造・技術などにより分類のしかたが異なるわけであるが、壁の有無は、第一に材料に大きく関連していると言えよう。しかし、それは木・石・煉瓦というような材料だけの分け方ではなく、その空間形成のための技術的方法に左右されるものである。例えば、同じ石造建築であっても、石を積み重ねているものと石の柱を建てているものがあり、同様に木材を用いてもヨーロッパに見られる木造教会の作り方と日本の木造建築とは構造が全く違うということが出来る。これは、大きく柱梁構造と組積造構造などに分類され、前者は垂直な柱の上に水平な梁を置いて開口部を覆う方法であり、後者は、壁と壁の間を半円形のアーチで結んで、その上の架構部分を支えるものである。この組積造構造が、煉瓦造による建築及び石造建築に一般的のものであり、メソポタミアの建築やローマ建築及びロマネスクやゴシックなどの様式がこれに属する。

つまり、壁は建築の構造上、必然的に生まれてきたものでもあった。この組積造構造による壁が、西洋建築における壁であり、壁に対する開口部の拡大がそのまま建築の様式史ともなる程、壁の存在は大きなものであった。

2. 壁画と壁掛け

壁面へのヒトの働きかけは、多くの芸術を生み出した。その中で内部空間に関するものとして、壁面に直接描かれた壁画と、壁面に飾られた壁掛けをあげてみたい。まず、壁画と呼ばれるものは、旧石器時代後期に現われた洞窟壁画が最も古い形として存在する。それは、自分達のまわりの壁面に何か記すことにより、実際の岩に囲まれた空間を自分達の望む空間に変えた

最初の例として考えられるであろう。壁画は、その後も墳墓や建築と結びついて世界中で見られるものである。

一般に壁画の技法としては、フレスコ・テンペラ・エンコースティック・モザイク²⁾等があり、中でもフレスコ画はローマ時代イタリアを中心に広く使われた方法であった。これらの壁画の特徴として宗教上の意味や絵画的価値と同時に、深く建築と結びついていた点があげられる。例えば、単なる装飾を描く場合においても空虚な壁面を飾るだけではなく、建築の諸部分を視覚的に分節し、相互に対照させる効果も含まれていたのである。また、壁面のもつ平面性を、ある空間では強調し維持したり、ある空間では視覚錯覚的な空間描写により平面性を和らげたりするのである。それは建築の内部空間を実際の空間以上に効果的に見せるために使われていたわけである。

また、大理石の化粧パネルの代用として壁面にフレスコ画でそれを模倣したり、建築的な背景や、人物群像による場面が描かれたりしている³⁾ことは、壁面処理の方法として用いられていることを示す。このフレスコ画の隆盛期はロマネスク期(11~12世紀)であり、中世初期のビザンティン文化においてはモザイク装飾が用いられ、また、壁面が窓のステンドグラスに変わっていたゴシック様式など、人々の壁面への様々なかかわりが見られるのである。

一方、壁画のように壁面に直接制作されたものに対して、「移動し得るフレスコ」として愛好されたタピスリー⁴⁾がある。それは、壁面とモノとのかかわりで空間をつくり上げる造形表現としてとらえられよう。

タピスリーもその発生は古く、洞穴の入口で風の流れを防ぐために動物の皮を掛けるようになって壁掛けが発明され、すぐにそれを織るようになったと考えられる。しかも、エジプト人・バビロン人等、モニュメンタルな織物で彼らの建造物を飾っていたことは、記録としての壁画と類似している。中世になると、タピスリーは、教会や修道院より、むしろ城において使われていたと考えられる。それは、その頃のゴシックのモードは、教会の壁を開け、大きなステンドグラスをそこにはめ込んでいたためで、他方、城館は、依然として要塞であり、門は狭く窓は高くしかも小さく、タピスリーを掛ける必要があったと思われるからである。また、当時の領主など経済的に恵まれていた家では家具のほかに壁掛けが揃えられていた。当時の領主たちは、いわばぜいたくな放浪者であり、戦いにでかける時にはその権威を誇示し、家具類も彼らと共に移動していたのであり、当然タピスリーも携行した。そして宿営地に到着すると羊毛の重い巻物をおろし、のばして壁にかけさえすれば、親しみ易い自分の邸にいるような雰囲気を感じることができた。また、冬には隙間風を遮った。こうした使い方のほかに共同の大部屋を各人別個の空間に区切るために使ったり、祝日に家々の壁に掛けられたりしていた⁵⁾。

この庶民の家々の壁にタピスリーが広まっていたことに関して、興味ある指摘がある。それは、「ホイジンハは当時のある文書のなかで使われている『部屋』^{シャンブル}ということばについて、『<シャンブル>とは、ここでは、壁掛けとベッドのカヴァー、絨毯など、つまり部屋の装備品として使われている、いっさいがっさいをひくくめるための全体』を意味した。』⁶⁾と多木浩二の著「生きられた家」に書かれている点である。これは、空間に意味をもたせるために、モノをかかわらせてきた造形表現の例として見ることができよう。彼らにとって部屋としての空間はモノによって成り立つものであり、モノとモノの関係、モノと空間(この場合の空間はモノのない部分という意味での空間)との関係に対する感覚が、室内装飾のかたちで現れているのである。

フレスコ画においても、タピスリーにおいても、建築とかかわりながらその空間をつくり出してきた長い歴史を持っている。しかし、次第にそこに表現されたものが、独自の価値を持ち独立していくという過程を歩む。壁に密接にかかわったこれらの造形は、徐々に新しい形式を獲得し、それぞれの発展を続けるわけである。しかし、壁から独立した絵画も、他の用途を見つけるタピスリーも、壁とのかかわりをなくすことなく、壁を飾る多彩な方法の一つとして生き続けている。それは、教会や支配者のものから、庶民の生活の中で広がり、壁面の造形としてその展開を見ることができるのである。

3. 現代生活における壁面空間と造形

本年、アメリカで研修する機会があり、学校訪問といくつかの家庭に滞在する体験を得た。また、過去におけるスウェーデンでの生活とヨーロッパ旅行の体験から、その様子について考察してみたい。

まず、彼らの生活の中で壁面は、教会におけるフレスコ画がそうであったように、その家の持ち主の空間表現の場であると言える。気軽に壁を塗り変える。壁紙を貼り変える。壁掛けを楽しむ。壁に様々なものを飾り、生活の中にディスプレイの感覚や習慣が根づいている。例えば、フレームのついた小さな古い写真を一見無秩序に数多く飾っているのをよく見る。これは自分の家族に関係するものだったり、全く関係のないものだったりするが、まるで写真を見るためのスペースのように空間をつくり出しているのである。絵を飾る場合でも空間に合う絵を自分の感覚で選び、時々変えながら、住空間の表現を楽しんでいるように思える。また、一つの部屋を壁面を中心に照明・家具などで、いくつかの空間に分けて構成してることが多い。物のディスプレイや多様な空間演出の感覚は、驚くべきものがあり、物と空間の強い関係の中で培われてきたものであろう。そして彼らは、気軽に家の中を案内し、自分の演出を説明してくれ、人に見せることを楽しんでいる。そのほかスウェーデンにおいては、タピスリーや他の素材の壁掛けが、伝統的工芸の一つとして生活の中に溶け込んでいた⁷⁾。アメリカにおけるキルト⁸⁾も、生活から生まれた造形として、いろいろな場所の壁にぶら下げられていた。学校でこれらのものを子ども達がつくることを教えられていることも、大切なことであろう。

このように彼らが、壁面をそこにただ在るものとしてではなく、積極的に働きかけることによって、自分のためのもの、自分といっしょに変わるものとしてとらえていることがうかがえよう。この環境に関心を持ち、積極的に働きかけ、より豊かな環境につくり変えていくという態度が、環境教育の基本であり、環境造形教育においては、特にモノを造ることをその核とするものである。単にモノを制作するのではなくモノと自分と空間のかかわりを学びながら環境をつくり上げる点が重要であろう。

では、次に日本の場合について考察してみたい。

III 日本建築における壁面空間と造形

1. 日本建築にみられる壁面

日本で建築に用いられた材料が、古代から現代までほとんど変わらず木材であったことは、日本建築の大きな特徴となっている⁹⁾。世界の多くの国々で、最古の建築は木造であっても、時

の経過とともにほとんど石造・煉瓦造に移行していったことを思うと、いかに木造建築が日本の風土や生活と合っていたか、改めて考えさせられる。例えば、古来、建築の用材として良質の木材に恵まれてきた点がある¹⁰⁾。しかし、それだけではなく、木造を固守してきた最大の理由は湿度の高い日本の気候と合っていたことであろう¹¹⁾。しかも、その構造は、スカンジナビアやスイスに見られるような丸太や角材を積みあげていく方法ではなく、柱を建てて屋根を置く方法をとっている点が特徴的である。

まず、最初にこの木造建築という特徴に基づき、日本人の住まいの中で、壁がどのような場所に、どのような形で、存在したのか概観し、日本建築における壁についてその全体像をつかむ。

ア. 洞窟一土や岩の壁面で囲まれている。(壁画の存在)

イ. 竪穴住居一周壁に沿って雑木を立て並べているだけで内部空間に柱はない。最初は、寝るためだけのものであったが、次第に生活のための場となった。それに伴い、内部の使われ方が大きく変化し、仕切りの壁や戸はなくても空間の機能分化がはっきりしていた。

^{がわかべ}側壁という側面に茅や葦などの草でふかれた壁があった。

ウ. 高床式住居（高貴な者のすまい）

平地式住居（農民のすまい）

高床式住居は時代によって様式が変わっている。大きく分けると、ごく初期の素朴な形が、次第に整備されて平安時代の寝殿造という様式にまとめられる。それが、また少しずつ変化しながら、今度は江戸時代のごくはじめに書院造という様式として完成する。そしてこの場合、寝殿造は公家、書院造は武家が原則的には住み手であった。寝殿造の建物において、壁は母屋の一方にある^{なんど}塗籠^{ぬりかご}という小室のまわりだけであった書院造における壁は、^{おしいた}寝室となる納戸のまわりと、押板や棚、書院に付いている壁の部分を中心であり、あとは固定化された襖障子や明り障子の内法の上の小壁の部分である。但し、小壁は真白の壁を用いていたことから、そこは何もないことを意味するとも考えられている¹²⁾。

高床式の高貴な者のすまいに対し、農民（後には町民も含めて）は、少しずつ住宅形式が変化していったものの、ずっと土間を内部に持っていたという点で、平地式住居であると言えることができる¹³⁾。建物の平面構成は、土間と土座、土間と土座と板敷（農家）、通りにわ（土間）と板敷と商売をするための高床の部分（町家）など¹⁴⁾、生活空間の機能が未分化な状態で、壁はまわりを囲うための竪穴住居の草による側壁の変形と考えられる。

2. 特徴的建築様式における壁面空間と造形

日本の建築の中での壁を概観してみると、まず壁が少ないと言うことができる。しかし、それは、建物の一部としての目に見える形での壁がなかったということであり、壁面としての空間をつくり出すものがなかったという意味ではない。次に現代の一般的すまいの原型となっている代表的様式を取り上げ、日本の建築における壁面空間の考え方とその造形行為とのかかわりについて考察する。

ア. 寝 殿 造

高床式住居の最初の形は、平面は長方形で、奥に板または草壁で囲まれた閉鎖的な空間があり、前室が簾などを垂らした開放的な空間となっていたと考えられている¹⁵⁾。この閉鎖的な空間が寝室であり、開放的な空間はいわば公的な空間である。寝殿造はこれを基本とし、閉

鎖的な空間が極端に縮小され、開放的な空間が非常に拡大されたものである。内部を見ると、古代の建築と同じように身舎部分と庇部分からなっていたが、身舎に片庇、二面庇、四面庇や孫庇が付いて、外へ外へと広がっていく空間をつくり出していた。また、壁は塗籠の周囲に見られるだけであることから、何ら間仕切もない板の間が広がっていたと考えられる。これは、当時の貴族の住宅が一種の公邸のようなものだったためであり、その都度住み手の必要に応じた空間が求められていたからであろう¹⁶⁾。

従って住み手に合わせて住みやすくするための、また儀式や行事のために室内空間をつくり上げるための多くの家具調度品が生まれることになる。それらの家具調度品を用いて、家の中を整備することを当時は「しつらい」（舗設、室礼などを書く）と呼んでいた¹⁷⁾。この舗設の家具には、間仕切のための家具が多く含まれ、壁としての役目を果たしていた。

この壁面空間をつくり出した舗設の家具をあげると、まず、風や寒さや人目を避けるための屏障具¹⁸⁾がある。この屏障具には、御簾、壁代、引帷、軟障、障子など建物につけて使うものと衝立障子、屏風、几帳など独立しているものがある。このうち建物の一番外側につけられるのは御簾で蔀戸に沿ってかけられた。蔀戸は表、裏が格子で間に板をはさんだ戸であるので、閉めれば真暗になるので昼間はあげておく。このため目隠しとして御簾を掛けた。

御簾の内側で一緒に掛けられたのが、壁代である。布を貼ったもので、母屋と庇の間の間仕切として使われ、季節によって変えたり、夏ははずされたりした。冬は平絹に紫茶の朽木型文様や縹緗文、夏は生絹に白泥で花鳥や秋草などを描き、裏はいずれも白平絹を瑩（艶出し）にして、上下に袋乳をつけ、上には綱を通す。表には、一巾ごとに野筋という紐を垂らす。これは巾約三寸長さは壁代と同じで、平絹にやはり染めや彩色による文様が施されている。壁代を巻き上げる時は、下の袋乳に木端という板を入れて、御簾と一緒に巻いて野筋で結ぶ。

几帳は、御簾の内側に立てられた衝立で、台の上に2本の柱を立て、上に横木を設け、その横木に布を掛けたものである。

また、襖障子は、木製格子の表裏に絹や紙を張り、絵を描いたもので、周囲には黒塗りの縁が付けてあった。その絵は、表には中国式の、裏には日本風の絵を描くというのが多かった。

屏風は最も絵画的表現の見られるものであるが、古いものには中国の影響が多く、次第に図柄も作り方も日本化してくるものである。日常生活で使うものは、やまと絵が描かれるようになって、その画題は日本の四季十二ヶ月の風景とか、各地の名勝であった。

このように間仕切のための家具のいくつかをあげてみただけでも、その室内の様子と人々の暮しが浮かんでこよう。現存するものはもちろん、絵巻物に描かれているこれらの家具は、その時々空間をつくり上げるための優れた意匠を備えているものであった。

例えば滝沢健児が、その著『すまいの明暗』の中で御簾について描写している部分を引用すると、

内部がトーンを落とした均質な暗さをもっているだけに、ソフトな空間の奥行を深め、空間そのものを視覚化したものである。……器と中味という考え方からすれば、中味が見えるでも見えないでもないといった、微妙なバランスを果たす器としての御簾は、単なる体裁としての役割だけではない。内と外とをつなぎ、さまざまな操作を可能にした空間の道具であ

る。…

と述べている¹⁹⁾。このような空間をつくり上げるための家具をうまく使いながら人々は状況に応じて環境構成をおこなっていたと考えられる。ただ一枚の襖障子が表側と裏側に全く異なる空間をつくり出し、儀式、会、宴、あるいは病床や出産の空間構成を可能にした。これは、モノを置くことで空間が変わるという、ヒトとモノと空間のかかわりの最も日本的な例であろう。また、その意匠の目指すものは、自然との融和であり、自然の変化に応じて、掛けたり、はずしたり、あるいは半分開けたり、重ねたり、自然とモノへの多様な働きかけが、空間をよりよく変化させていったのである。そして、このような自然を取り入れていく行為が、次第に壁面としての自然を生み出して、次の文化へとつながっていく。

間仕切によってつくられた移動可能な壁面空間は、西洋の固定した壁が空間に決まった機能とそのための意匠を求めるのに対し、空間の機能についてのフレキシビリティをもたらし、これは、現在の日本人の生活の中にも見られることで、和風住宅で襖を取払って広くするとか、布団の上げ下ろしをするとか、食事の時だけ膳を出すとか、西欧型の一室一機能と基本的に異なる伝統に基づくものであろう。さらに、この空間のフレキシビリティは、モノによって空間の機能を変えるという日本独自の空間図式を成り立たせる。「物にこころがある、という日本伝来の考え方はアニミズムというよりは、こうした物のふるまい、物とのつきあいから生じてくるのではなからうか」と多木浩二が物の象徴性について述べている²⁰⁾ことは、モノと空間の関係を考える上で興味深いところである。

イ. 書院造

この建築様式の大きな特徴は、室内設備の固定化、建築化である。それは、空間の機能が定まってきたことを意味し、そのための意匠の成立を迎えるものである。実際、書院造において見られる住宅様式は、現在の和風住宅の原型として受け継がれてきたものが多い。この書院造における壁面空間への造形として、障子絵と屏風絵を取り上げてみる。この場合の障子は、今の襖にあたる部分で、間仕切が固定したために部屋が生まれ、その室内装飾として重視されるようになってきたものである。そうすると、次に絵の方に引っぱられて障子の方が変化するようになり、部屋全体を埋めつくした金碧濃彩の障壁画などはその例となる²¹⁾。それは、フレスコ画で埋めつくされた教会の内部のように空間を象徴化するものとなっていくのである。また、襖障子に描かれた障壁画は、一つ一つの部屋を印象づけるために役立ち、多彩な生活空間を様々な画面効果によって分節する働きを持っていたとも考えられる²²⁾。

一方、屏風画は、奈良時代から使われていたが、中世における建築空間の固定化が、その一双形式成立に大きく影響し²³⁾、描かれたものも山水、四季などの自然の情景から次第にモニュメンタルな表現を取り入れるようになった。例えば、戦勝記念である合戦図屏風、都市支配を象徴する洛中洛外図屏風、版図拡大の野望を表わす世界図屏風や南蛮屏風等であり、武家権力者にとって力を誇示する道具であると同時に、一種のモニュメントでもあったと言える²⁴⁾。屏風は、現代の生活においても、金屏風があれば慶事の間を表わすとか、そのようなインテリア・ディスプレイとしてたいへん優れているものである。モノに意味を持たせてきた日本の文化の伝統であろう。屏風においては、障壁画のような約束ごともなく、どんな奔放な画題でも構図でもとれるし、どこへでも動かすことができる²⁵⁾。これは、タピスリーが移動できる室内装飾であったと同時に、王侯貴族らが自分の一代記や戦勝物語などを題材にさせ

たことと似ている。

フレスコ画とタピスリーの関係は、襖障子の絵と屏風の関係に類似しており、それは、建築空間に意味を持たせるためのモノであり、その意味の固定化が特徴である。タピスリーや屏風は、そこに絵が描かれたことによって意味づけされたモノとしてとらえることができる。

これらの積極的に為された表現に対して、日本独自の消極的表現としての壁面空間がある。それは、目立たないが優れた美しさを備えているもので、現在の住宅にも多く残っていると思われる明障子である。鎌倉時代から南北町時代にかけ盛んになった紙の生産に伴って普及した明障子²⁶⁾は、建物の外部に面した場所で重要な役割を果たした。

まず、母屋の内が明るくなり、しかも保温もよく、取り扱いが簡単になったという点があげられる。さらに、和紙という素材の持つ美しさだけでなく、自然の条件に微妙に反応し、光や風、暑さ寒さ、湿気など内部の空間に反映するという、自然を取り入れた壁の役目を果たしている。中国や韓国にも木の棧を格子に組み、紙を張った建具はあるが、これを引き違いに開けたりするのは日本だけのものである²⁷⁾。つまり、左右に開けることによって、そのまま外部空間とつながり、自然そのものの壁面を鑑賞できることになる。この自然そのものを壁にしてしまった日本の壁面空間というものは、壁面に絵を描いたり、ものを飾ったりする必要のない多様な空間を住む人に与えた。そして、室内としての空間そのものに意味を与える感覚に対して、空間を多様な意味を受け入れる場として設定しておく感覚が、対照的である。この自然を内部に取り入れる感覚が、数寄屋造の建物自体を庭園の中にとけこませる建築へとつながっていったと思われる。

このように壁面を見ていくと、書院造においても一つ壁面として独立した特徴的な空間がある。それは、座敷飾りの中心となる押板の空間である。この押板の起源については、仏画を掛けて拝んだとする仏壇起源説と、仏画だけに限らず絵画鑑賞形態の変化としてとらえる説がある²⁹⁾。しかし、ここで壁と空間のかかわりで考えれば、重要なのはモノを掛けて鑑賞する壁面という点である。つまり、仏画も含めて当時、中国からきた掛軸などを飾って鑑賞するための次第に定まってきた空間と言えよう。それが文具・茶器などを置押板と呼ばれる台の上に飾って鑑賞していたことと結びつき、造りつけの押板になった³⁰⁾。外部から守るための壁でもなく、間仕切のための壁でもなく、絵を飾るための壁面空間ができたわけである。その上、絵と一緒に工芸品を飾り、花を生け、どこに何をどう飾るか、その会の出席者や会の趣向に、いかにふさわしい構成をするか等、直接モノによって空間構成をするための場を生み出したのであった。他の国からの文化を吸収しながら、自国のものに変えるその柔軟性は、空間の柔軟性によるところが大きいとも言えるのではないだろうか。

以上、日本の壁についてみてきたが、住宅以外の壁面にも日本独特の空間意識を示すものは多い。例えば「結界」と呼ばれる格子の木の柵は、区切りながら同時につなぎの役割も果たすという固定的な壁とは異なる空間構成の手法を示すものである³¹⁾。このように様々な日本の空間処理、さらに作法、しきたりなど共通の空間図式と壁は深くかかわってきたと考えられる。

IV 近代建築における壁

日本の建築は、明治期に洋風建築技術を取り入れはじめてから、洋風建築を少しずつ消化するような形で現在に至っている。第一次世界大戦後、ヨーロッパの建築運動に刺激されておこった分離派建築会による日本最初の近代建築運動は、大正期の風潮を反映した住宅改良や生活改善を求め、近代工業社会に合った新しい建築表現を求めたものであった。また、集合住宅に対する関心は、ヨーロッパ諸国において高まったばかりでなく、日本にも大きな影響を与えた。関東大震災後にヨーロッパの都市のすまいであるアパートメントハウスが一般の住宅として使われるようになり、第二次世界大戦後には日本住宅公団による“団地”の建設が始まった。

このような動きは、生活のしかた、家族の関係、社会経済の変化などと相互に絡み合いながら日本の建築に大きな変化をもたらした。例えば、新しいすまいは家族本位のものでその中心を居間や食堂に置くのが一般的となった。この空間は、家族のだんらんや接客をも兼ね、最も社会的なはたらきを持っている。それに対して夫婦の寝室や子ども部屋は、最も個人的な部分として壁で仕切ったり、鍵のついたドアでプライバシーを確保した。また、都市への人口の集中化は、核家族化やすまいの高層化をもたらし壁に囲まれた画一的空間を生みだしてきたとも言える。

一方、欧米における近代建築は、世界中に影響を与えたが、人によりその評価が異なり、従って長い歴史の中でどのように位置づけられるか、まだ明確ではない。しかし、国際建築と言われるような合理的機能的考え方と、新しい材料・技術の導入及びその構造や外観の変化等、特徴的な点はあげることができる。その一つとして、構造用鋼材と鉄筋コンクリートの使用があり、それは組積式構造で成り立っていた建築の構造を根底から変えることになった。鋼鉄は建物に用いられる以前に何世紀も知られていたものであり、コンクリートもローマ人に広く使われていた。しかし、鋼鉄の梁や柱は、近代工業の産物であり、また、鉄棒とコンクリートを組み合わせるといことは、1890年代に発明されたことである³²⁾。

鋼鉄や鉄筋コンクリートの最も明らかな利点は、それらが非常に大きな距離に梁を渡せることであり、大きな空間を容易にそして経済的に覆うことを可能にした。また、要求されるどのような大きさの開口部でも壁につくることができ、壁全体をガラスにすることもできた。石造や煉瓦造の建築が壁と開口部とのつり合いの歴史であった³³⁾ことを考えれば、建築デザインに大きな変化をもたらしたことは言うまでもない。

そして、さらに根本的な変化として重みを支える壁が必要でなくなるという点をあげることができる。壁は単なるスクリーンとなり、その目的は内部の空間を包み、風雨を防ぎ、音を遮るだけのものとなる。そして、内部の多くの部屋の間仕切が、自由な空間に転換され、必要に応じて、一時的にも永久的にも好みの区画に分けられるのである。つまり、日本の木造建築が用いていた梁柱構造が、技術の発展に伴い、欧米において実現したというわけである。もちろん梁柱構造の方が優れているとか³⁴⁾、そのような問題ではなく、壁について考えれば、どうしてもなくすことのできなかつた壁を取り除くことができたという点で、画期的なことだと考えるのである。そして、自由な位置に自由な形で壁をつくることにより、新しい空間を創造することができるようになったのである。

日本の近代的すまいが、画一的な壁に囲まれた空間をつくってきたことと、欧米の近代建築

が壁を取り払うことによって新しい建築を志向してきたことを考えることは、とても興味あることである。盲目的に洋風建築技術を取り入れ和洋折衷のすまいをつくり出し、その空間に対する感覚や態度を洋風にしてきた日本人が、実は大切なものを失ってきたとも考えられるのである。それは、まわりの自然に対応した生活形態であり、自然を取り入れることで空間に働きかけをおこなってきた感覚である。例えば、壁に多様な表現をすることで、空間をつくり出してきた西洋に対し、日本人の壁に対する考え方は、多様に変化する自然を壁として取り入れるというものであった。そして、その自然にとけ込む考え方が生活の中に根づいていたと言えるであろう。

しかし、自然を取り入れた空間にまで壁が入り込み、しかも我々はどう対応するのか体験していないのである。壁に慣れていない日本では吟味することなく壁をつくり、画一的で冷たいしかも美的でない壁面空間をつくってはいないであろうか。壁をつくる場合に、材質・構造³⁵⁾・色や形・窓や戸との関係等、そのつくり出す空間を考えて検討しているであろうか。特に学校などの子ども達に大きな影響を与える場で、鉄筋コンクリート造の灰色の冷たい壁に囲まれていることがよいものであろうか、考えていかなければならない。そして、壁の増えている住環境を現実としてとらえれば、西洋建築に見られる壁面空間とモノのかかわりについて、よいところは学んでいく必要があるのではないだろうか。

V ま と め

人類は住むための空間を探し、その空間の中で生活を始めた。その後、自分達の生活に合った空間を建築という方法でつくり出してきた。その空間を生み出すものの一つに壁がある。壁は、天井を支え、空間を区切るためばかりでなく、空間に意味をもたせることを可能にした。そのために人々は目に見えない空間の意識化を造形という手段を通しておこなってきた。その手段の相違が、逆に、空間意識を異なるものにし、空間へのヒトやモノのかかわりを変えた。

本稿では建築の壁を通して、空間とヒトのかかわりを探ってみた。壁への造形表現は、作品として評価されると同時に、ヒトの空間への働きかけとしてとらえることができる。そして、それはヒトが、自分と世界とのかかわりをつくっていくためのものなのである。単に壁のあるなしから出発した問題が、ヒトの空間やモノとのかかわり方の違いを導いた。我々日本人が持っているモノや空間とのかかわり方は、共有の空間図式を内包していることをここでとらえておく必要がある。そして、現代の多様化した住環境の中にあっても、まず、我々は人間の働きかけを拒むモノや空間をつくってはならないであろう。その上で、新しい造形活動を環境空間創造のために試みていかなければならない。

注及び引用文献

- 1) 柱梁構造を楣式、組積造構造を栱式、あるいは、木骨建築と丸太建築などと呼んだりすることもある。
- 2) フレスコは湿っている漆喰塗の上に描き、固着剤を必要としないのに対し、テンペラは、

卵黄や膠を混ぜた不透明顔料を用いる。また、エンコースティクは蠟を混ぜた顔料を用いて描く。モザイクは、石や硝子の立方体の細片を寄木細工式に接合してつくる。

- 3) 小学館 世界美術大事典 1989 p. 125
- 4) 縦機あるいは水平機を用いた特殊な技法による織物のことであるが、一般的にはこの織り方による比較的大きな壁掛けのことをいう。
- 5) モーリス・ピアンゾラ, ジュリアン・コッフィネ 川合昭三訳『LA TAPISSERIE』美術出版社 1975, p. 66
- 6) 多木浩二 『生きられた家』 青土社 1984, p. 111
- 7) スロイドの中の一つで、木工・金工と織物がある。
- 8) キルティングの方法で作った壁掛けなどをいう。
- 9) 宮川英二 『風土と建築』 彰国社 1986, p. 25
- 10) 同上書 pp. 16~22
- 11) 小原二郎 『木の文化』 鹿島出版会 1972, p. 123
- 12) 平井 聖 「木の生活空間」『木の住まい』 朝日新聞社 1984, p. 112
- 13) 小泉和子 『家具』 近藤出版社 1980, p. 11
- 14) 稲葉和也・中山繁信 『日本人のすまい』 彰国社 1983, pp. 42~47
- 15) 平井 聖 『日本住宅の歴史』 学芸出版社 1982, p. 26
- 16) 小泉和子 『家具と室内意匠の文化史』 法政大学出版局 1979, p. 21
- 17) 同上書 p. 22
- 18) " pp. 22~26
- 19) 滝沢健児 『すまいの明暗』 中公新書 1982, p. 101
- 20) 前掲書 6) p. 47
- 21) 前掲書 13) p. 45
- 22) 原色日本の美術 第13巻 「障屏画」 1967, p. 225
- 23) 武田恒夫 「屏風絵における一双方式の成立」『日本屏風画集成』 1981, p. 112
- 24) 前掲書 13) p. 49
- 25) 前掲書 16) p. 195
- 26) " p. 132
- 27) 前掲書 12) p. 115
- 28) 前掲書 14) p. 51
- 29) 太田博太郎 『床の間』 岩波新書 1978, pp. 59~84
- 30) 太田博太郎 『日本建築史序説』 彰国社 1989, p. 142
- 31) 伊藤ていじ 『日本デザイン論』 鹿島研究所出版会 1966, p. 51
- 32) J. M. リチャーズ 桐敷真次郎訳 『近代建築とは何か』 彰国社 1979, p. 53
- 33) 長谷川堯 『建築有情』 中公新書 1980, p. 68
- 34) 川添 登 『建築と伝統』 彰国社 1978, p. 188
- 35) 上田 篤 『日本人とすまい』 岩波新書 1983, p. 29

参 考 文 献

- 河簪実英編 『有織故実図鑑』 東京堂出版 1985
 ニコラウス・ペプスナー 小林・山口・竹本訳 『新版ヨーロッパ建築序説』 彰国社 1989
 ヒュー・ブラウン 小野悦子訳 『英国建築物語』 晶文社 1990
 ル・コルビジェ 前川国男訳 『今日の装飾芸術』 鹿島出版会 1966
 エドワード・ホール 『かくれた次元』 みすず書房 1986
 オットー・フリードリッヒ・ボルノウ 大塚・池川・中村訳 『人間と空間』 せりか書房 1983
 今和次郎 『住居論』 ドメス出版 1978
 篠原一男 『住居論』 鹿島出版会 1982
 東 孝光 『日本人の建築空間』 彰国社 1990
 中川 武 『建築様式の歴史と表現』 彰国社 1987
 吉村貞司 『日本の空間構造』 鹿島出版会 1982
 A・レーモンド 『私と日本建築』 鹿島出版会 1967
 川添 登 『現代建築を創るもの』 彰国社 1973
 鈴木博之 『建築の世紀末』 晶文社 1990
 日本建築学会編 『作法と建築空間』 彰国社 1990
 原 広司 『空間<機能から様相へ>』 岩波書店 1978

A Study of Wall Spaces as Environmental Arts

Yasuko ABE

ABSTRACT

The space of walls of Japanese traditional architecture has been comparatively small. This particular fact has produced the flexibility of spaces, and the special relationship between Japanese people and things in their living space. It is the relationship that spaces are made each time human beings relate to things inside their dwellings. Whereas in the Western European buildings, walls divide space decidedly; and each space has a fixed function and meaning.

Recently larger space of walls have come to be used in Japanese housing and public facilities than before. So that we Japanese should inquire into how architecture and people are related to each other since historically we have not experienced and enjoyed enough wall-enclosed living and working spaces.

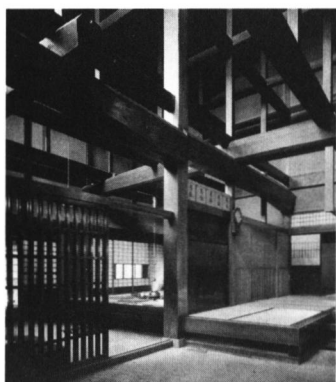


図1 柱梁構造による空間の例

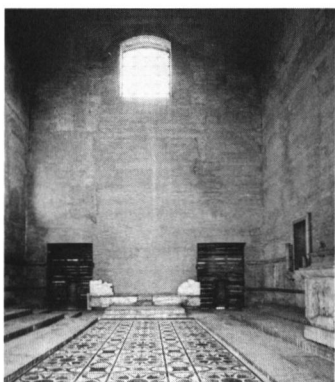


図2 組積造構造による壁の例



図3 空間を意識させるフレスコ画



図4 室内のための快い壁掛けータピスリー



図5 絵巻物に見られる障屏具

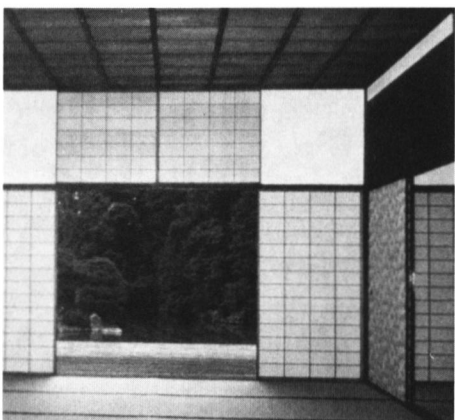


図6 明障子と庭園

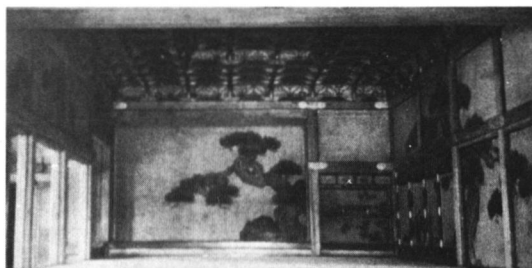


図7 襖絵



図8 屏風絵



図9 壁面と教室環境の例 (アメリカ・インディ
アナ州)



図10 図書館内の壁飾り



図11 壁面を使った立体的な
ディスプレイ

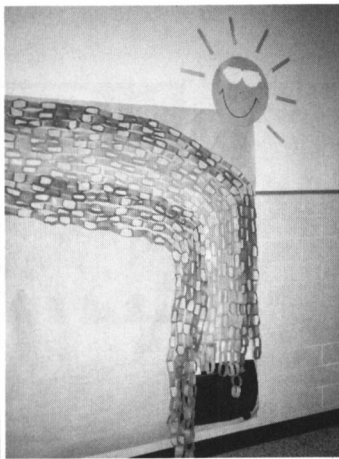


図12 廊下を使ったディスプレイ

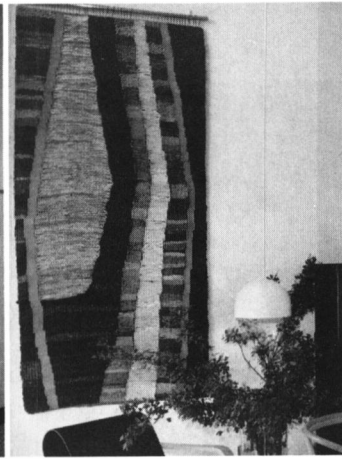


図13 現代のタピスリー (スウェ
ーデン)

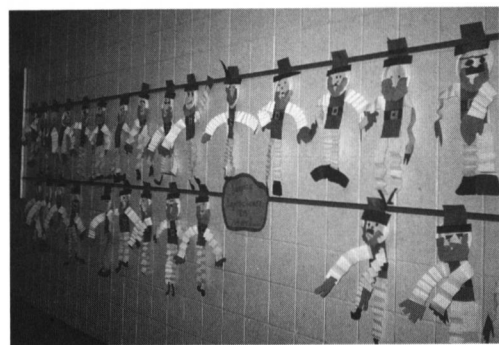


図14 廊下の装飾

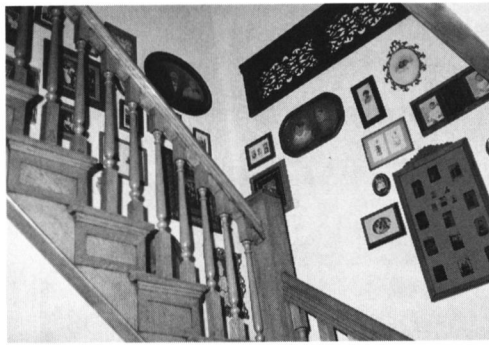


図15 階段の空間に飾られた写真・絵・工芸品